

傾城思升屋

豊竹若太夫直傳

上之卷 伊勢參り名所道行

相の山行く川の流れも。絶えぬ色里へ身賣
の。花の蕾より。金願を。懸けし神詣天津。
御國の二柱。女神男神の。間の山二見
朝熊も残なく拜みめぐればおのづから。
天の岩戸の開け初めし。心なりけり
形振は。ハハマフシ囊きふし繁き竹の杖。
眞音草鞋に抱帯。りんと小棧の高から
げ。フシしやんとする程物々しく。長の旅
路も揚屋人。向ふをきつと歩むにぞ。昔
昔の出端の癖やます参り下向も振り返り見
れば思ひの升屋なる。男も跡につくく
と。二人が中に供二人。フシオノ。手づから
へ持てる席火繩。煙比べんあだし野

やアレ御覽ぜよアノ山の畔にも。ナホス
人家二つ三つ。立並びたる。軒の。窓此
處も彼處も色故に朝に霧を拂ひつゝ。夕
に星を戴きて。西歸る山人。待つは誰そ待
つ言種の戯れ言。世界の人の樂みよ。フシ
わしは如何なる片思ひ。添ひ臥しばかり
妻と云ふ名のみ残して行末は。頼みない
身と知りながら可惜月日をうかくと。
暮しまするに胸窓な。いつまで草のいつ
か扱ア、嬉しやと。オノオノ思ふ事現に。間
へど口なしの口説の花のいぶり草どちら
に張が強いぞと。心の底を。惹いて見
る相撲取草も男子の。かたに平伏す習か
や。又芽を出す春の空陽氣の花に誘はれ
て。京街道の賑と名所古跡教へんと。親

にも乗らず馬借らず心の儘に假寝する妹
背は堅い國かして。フシ泊りどまりに。帯
解かず。夢を結べどまどろめど濡と云ふ
字は見も聞かじ。ナウそち達はさもなき
やア、氣の詰る道中と。戯れ行けば足輕
く皆口ごりや目塞笠。五色の網も目に餘
る。フシ思ひ一つを引締めて。見せばや誰
に近江鮎。堅田の浦に引く網の。フシ目に
も溜らぬ。涙ぞと連ねし人は誰そや誰
そ。文藝フシ秀俊夫婦の人々は。天とも地
とも思ひ子の彌生の前の。行末を。尋ね
出でにし言の葉や。我は日出度き共白
髪。變らぬ仲を神頼み。ナホスフシ奥様子達
がある仲を。オノオノ思はれ思ふ此因果どちら
がほんの戀ちややら。愔氣するにはあら
ねども。女心のくひくくと。戀慕の絆
ッレ止め難く。逢はぬすがの多ければ
胸の煙がぐらくと。ヌエオノ思ふも悲し思
はじと。我と我身に耻らひて。今は此身

も生如來殿御二人を二人して。情の帯の結目を心の儘に解く事の。ならぬも浮世なりけらし。粟津と聞くも。恨めしや。思ふ海洋の浦もはや。跡に見残し何時かさて儘に大津の。追分を。左へ取つて行く道は。萬代迄も狼狽の。谷の細道えい／＼えさつさ。さつても旅は物憂しと。云へどもそれは道連れの。善し悪しにこそ依るべけれ十日餘りは身の上を。忘れしとのをア、うたて七つの鐘の撞木町見て行かんとは我に又。アノ氣になれと云ふ事か急いで行かば淀よりの出舟に乗らんと夕日影。伏見堤に駐敷かせ各々。休らひ三貝給ひける

フシかゝる折しも。番者升屋の手代市兵衛。江戸店の勘定や又盆節季の金工面。彼是心の遺瀬なく旅立によき日取。今日吉日と只一人立出でて行く道の程。伏見堤に差しかゝり横兵衛を見るよりも。當笠脱



いで畏る。横兵衛ハット思ひしがさあらぬ體にて。ム、そちは何處へ行く事ぞ。市兵衛眼に涙を浮めコレ何處へとは情なし何と心得うかくと月日の立つも

御存じなく。餘り興がる御仕方モウよつ程がよござらう。コレお前の留守の内あそこからも爰からも。悪性金の催促し今日は訴訟に出る筈ぢや。明日は町へ斷る

と云ふに就けてはおいとしゃ。お年寄られて大旦那うろくとして人頼み。先づ一口は済みました。今一口は當月の晦日切に證文し。波風先づは納りしが商賣の拂方。爲替の遺練請取物餘日なければ私が。一先下り銀集め首尾繕はん其爲に。俄に今朝思ひ立ち八日を切つて參るなり。親父様の御立腹なか言葉に盡されず。それ故鍵まで取返し江戸通用の判も變り。粒一文儘にならず我人若い其内は。一度や二度はある習ひ。親前の悪性幾度と云ふ事なしされども親の子を思ふ。中にも隣の附いた子はこなたばかりと思召し。御用捨あるが仇となる。親に孝なく御參宮あればとて如何で神明納受あらん。見れば女中のお連もある。是は内々承りし出羽殿にて候はん。惣じて若傾城と云ふ物は世にある時は鬼や角と。日文血文の付け届け思ひつゝ

と。筆と口ではぬつべりと元手入らずに云ふことは。これ商賣の習ひなりそこを誠に思ひ詰め。親親方に損却し程を知らずに通ふ者。餘程足らぬうつじんと陰

で笑ふも御存じなく。大事の家業を振捨てどう思召して此身持コレ出羽殿。斯様に申すを定めし不審に思召さん。私はお家久しい御家來升屋の家を杖柱と。思



ひ詰めたる所存から入らぬ悔言申します。コレ此殿には奥様にお子達二人ござるぞや。如何に賢女なればとて女は相身互なり。權兵衛様が大切ならなぞ暇取つて似合はしい縁付でもなされぬぞ升屋の奥になる事は。是程も成りませぬ此方とちが胸算用。往て來る程違ふべし思ふ様にならぬとは。頭から知れた事まだ色艶のある内に。縁を切つて嫁入の。口聞き給ふが上分別何であらうぞ見苦しい。女を連れて伊勢参り。地斯うした噂人聞かば愈世間の沙汰悪しく。年久しき升屋の家ッ今に滅亡疑なし。地色奥様親御の御手前少しは恥ぢて御覽うじませ。お前の事は思はねど只いといは子達なり。其身持とは知らずして遅い時には待ち兼ねてつい御寝なるを見る時は人に言はねど男泣き。家來の身とし斯様に申すが奇怪なら。お手討なりとどうなりと心

任せに遊ばせよ。若し御合點のまゐりつゝ御心を直されなば。老後の思ひ出是に過ぎず。一生譜代に召使はれお家を枕死出の土産と存するなり。地色サア返答を遊ばせとヌエテ涙を。流し教訓す。地色かるを初め供の者。げに尤と尻込し草をひねりて跡退り。赤面してぞ居たりける。地色權兵衛涙をはら〜と流し。コリヤ市兵衛。最前よりの一言如何でか悪う思ふべし皆某が過ぞ許してくれよ。地さとりとは。今迄我儂なりけるも由なき者と交際て。世間の義理を大切に。頼むと云へば替なき命も惜まぬ所存から。一旦退いた出羽なれど引くに引かれぬわけありて。二度斯うした事なりしが全く子のある仲を裂き。是をと思ふ志弓矢神も照覽あれ。更々さうした事はなし。地色似合はしい事あれば今でも縁に付く合點某氣を張る事はなし。又此度の御参宮幸

ひ我より願ほどき。神諺と思ひつゝ召連れたるも過なり。地今よりして心を變へ親達へも孝を盡くし。女どもにも氣を休ませ子供が生先見る様に。又そち達が忠節いとぞ報する事あらん。此上ながら江戸表首尾よく捌き。商の。手筈萬事を頼むぞと。ヌテ世にしを〜と云ひければ。地色市兵衛三度禮拜し涙を流し申すやう。詞さて有難や忝なや。斯様に申すも大切に思ふあまりの悔言。此晦日の銀子の儀張合と云ひ意地なれば。身賣りてなりと濟まさねば御隠居様の一分立たず。地一刻もはや御下り御相談遊ばせよ私伏見に一宿し。隨分道中急ぎつゝ江戸より吉左右知らせ申さん。コレ出羽殿。權兵衛様への心中は。善くと悪しくと嫁入し世帯姿を見ぬ内は。地コレ此の男は吞込まぬ必ず言葉を違へまい先づ〜さらばと暇乞ひナリ。心靜に。歩み行く。地色權兵衛

跡を見送りく、差勝さうつ向いて居たりしが、暫しばくありて押肌おしむ脱ぎ既に自害と見えけるを。かるは驚き縋り着きナウ氣が違うたか何事ぞ。市兵衛殿の御意見が心にばし附つつたか。一つも腹の立つ事なし但しは外に思はくのありて斯うした御事か様子を聞かぬ其内は中々儘にはさせませぬどうぞくくと。縋り着き、聲も惜まず。歎きける。權兵衛力なくくもヲ、不審は尤なり。手代が一言親よりも猶重し。つくく事を案するに此晦日の切金は。もと某が悪性にて兄弟同事の友達に。借り貰ひたる事なればよくよくの事なくては。親父の耳へは入れまじき如何に親子なればとて。此金立て、貰うては二度對面なり難し。自分おのれに埒あはれ明く分別先立て致せしが。聞かると通り鍵印判迄取られし故才覺さいかくの種盡きたれば。親朋友の義理立たず人に指差し笑は

れんより。此淀川の水層となり今の苦患を逃れたし。爰を退いて死なしてくれ死なすに是が居られうかと。大地を叩き齒嚙かぶをなし。せき上げく歎きしは哀れせつなき次第なり。かるも涙にくれながら日頃の氣質かたぎで其義理は。死んでなりとも立て度い筈併し參宮の downward といひ。こなんばかり死なんして私は死なすに居ようかえ。若しも二人が死んだらばよしなき惡名取るのみか。御隠居様や奥様へ言譯何と立つべきぞ。爰は思案もあらう事マア何程の銀ぞいの。イヤ大分の事では。二貫目なれど世の中の儘にならぬは金ぞかし。ハテ輕忽けいごつなそれ程の金で買はるゝ命なら。先づく死んで下んすな何卒金を才覺し。命を買うて取りませうおぬくい金の出る思案。是も御神の御みかみ惠晦日にわし方より。持たせて送らん構へて短氣をやめて給はれと、涙を流し

止めける。權兵衛悦び流石奸みのしるしとて。叶はぬ迄も力草付けて給はる志。悲しかなし、悲しかなし、恥かたじけなく。から此金をそちが手から調へんとは如何にしても吞込まず。潜上も時に依る阿房らしいと不興ふこう顔。ハテ如何しようとするしよと盗んでさへ來ぬ金ならば。わし次第にして置かんせ。ム、それは誠か眞實か。此金濟ませば内證の。膽いさりと埒明いて此處彼處の首尾もよし。確たしと才覺なる事かア、くどいこと方様の命に替ゆる金なれば。覺えのな事云ふものかヲ、嬉うれしさもあらばそち達は舟にて下れ。某一入陸行かば夜半の頃は歸るべし。早く急げとありければ。ハテ兎も角も云ひながら。夜道一人は氣遣はし武兵衛ばかりは連れ給へ。いやくは邪魔になるこち權はずとはや往きやと。身拵する折からに乗合舟の見

えければ是幸ひと呼ぶ聲に舟を堤に、フシ
へ寄せければ、地色皆々乗つて出で舟を遠く成るまで見送りく。靜に行かんせ明日の晩。必ずやいと云ふ聲も見えず。なり行く、三夜の道。地色元來權兵衛不敵者常に手馴れし大鯨の。二尺二寸に反打ちて事がなうえと腕まくり暗さは、地暗し雨雲の星の光もあらばこそ。一人行く身の跡先に心を配り氣を付けて金とと堤の片岸を故意と通れば橋本の。宿の出はづれ葛葉なる。森の下風そよくと、オウ吹く夜風は身にぞしむ、フシ今や賤の男。賤の女が葦の辛苦の休み時。現に戀の夢や見ん。ア、世なりけり浮世ぞと。問はず語るか森口の一里塚にぞ着きにける。

地色時に不思議や人魂と覺しき猛火くるくると。足元近く飛來りはつと燃えてははつと消え。ムエテ更に別は見えざりき。地色權兵衛少しも騒がぬ體様子を見届け歸らんと。鈿は元寛げ身を滑め、フシ寄らばつかん才勢なり。地色暫くありて怪したる者。髮逆様に經帷子。杖に縛りて、フシよろくくと。堪え難き聲を上げあゝら闊浮戀し人戀し。そも我はこれ主を殺せし十惡の。罪に沈みて修羅道に。落ちて浮かまぬ忠藏が、ムエテ亡き佛にてありけるなり。地色夜々迷ひ此道に出でて行きかふる人の。回向にも預からば浮む事もやあるべしと。姿あらはに出でし身を救けて得させたびの人。思へば憂しや怖ろしや。水の如き大身鏡。左右に別つて腋壺を。差通し差通さるれば氣も魂もへ消え消えとなる身の果を。思へばく悲しやと。フシ齒切をしてぞ伏したりぬ。地色流石の權兵衛氣味悪く世に幽靈と云ふ物は。操歌舞伎で見たばかり正しく有るに極つた。様子も見度し恐ろもあり。逃けてや去なんと歩みしが。イヤマテ我も所では

男い一分磨く者。一つは心試と云ひ閻魔の廳の訴に此幽靈を手籠にし大坂への土産物。是に上越す物あらんとそろり。そろりと立寄りて扱て痛はしき物語。今日ムエテあるまいものあらざれば。如何にも回向仕らん南無幽靈頓證菩提。浮み給へといふ聲の透を窺ひ取つて伏せ。散々地色に踏付けしは、フシ不敵にも又いさぎよし。地色其時幽靈聲を上げ苦しやせつなや命を助けたびの人。地色全く誠の幽靈ならず耻かしながら私は。此街道の非人なるが仲間四人が片輪にて、地色露命かつく、なるに依りふと幽靈に思ひ付き。或時旅人を嚇せしに錢金有る程置いて行く。何でも是はしてやつた只取る山の時鳥。曲に血を付けて此仕合。許させ給へ目がまひます。太郎作のら藏ぬら坊ちやつと来てお詫言。申してくれと云ふ聲にヤレじや

がたらが仕損じた。我行人と一緒にと堤の下より上るを見れば目無に跋躰をはじめ三人頭を地に付けて。只御助け給はれと、フシ手を合せてぞ詫びにける。擧句の果に横兵衛も腹筋緩つてかつら〜と笑ひ。■おのれ等片端踏み殺すは易けれど。参宮の下向故命を救け取らずなり。重ねて旅人を惱まば踏みひしやくぞ嗜み居れ命の代りに幽霊の仕掛事。身が前でして見せをれイヤモウそれは御免といふサアせまいかと反打てばヤア致しませう致しませう先づ一番は人魂の心持にてお子達の。盆に點する酸漿の。中にも小さい提灯を。竹の先に附けまして堤の上をころ〜と。こかして廻れば其次が。亡者笛とて斯様に吹く。三番には太鼓にてどろ〜と打ちしまへば四つ目が斯うした幽霊にてア、悲しやと云ふ幽切。笈の中へ茶碗の割。入れて揺れば遠音に

はかり〜と聞えます。■ナウ耻かしと打明けて、フシ語るも可笑しかりけらし。■横兵衛どつと打笑ひ。いで〜とつて遊ばんと。故意と言葉を荒らかに。■とても五體不具な奴生け置いて益なしと臨差するりと抜きければ非人ども仰天し。むら〜はつと逃げて行くヲ、さもあらんと思ひの外の。足達者な幽霊のギョギョ底叩きとは是ならんと聞く人。喜び勇みける。

中之段 井傾城の瀬戸物見世

■移れば變る飛鳥川。昨日は勤今日は又。町家住なる新世帯。瀬戸物店をこりと笑ふ布袋の水入に。清水焼の天目や浪速入江のあし焼は。■エネ所がなる名物と。棚の向ふに飾らせて。角の暖簾大津屋と氣の變りたる書付に店の。出入は伊豫籠。掛直なしとの看板は。動した

身の、フシ筆づらや。買手が寄れば。内よりの。返事あだなや顔見んと。夜は男の習かや。■戀と思ひを塙筋道頓堀から北濱まで又あるまじき商を、老舗にせよと彼の人の。世話になる夜は通ひ来て。轉た寢覺めのフシ楽しみも。儘にならざる。山。吹の色や。情みて内方の首尾散々と聞き兼ねて。女心にとつ措いつ胸算用の遺線に。■エネ心の隙もあらばこそ。少し手掛ある故。男の首尾を繕ふは、フシ元が勤の利發なり。■此二三日程ふつ御出でとてもあらざれば。人に語らず物案じ疊算やら何やかや。亂れ心の遺瀬なさ一人の母によしあしを。隠すも孝の道ぞとて、我と我身を責めにける。■然る所へ乳兄弟京の喜兵衛下りつゝ内に通ればかゝは誰そ。■マア何として下らんした。■と、様はまめなかせ先づはこなたも息災なお顔見ましてかゝ様も。■嘸お喜しう

思されんサア上らんせと云ひければ。喜兵衛も挨拶こと終り。シテ母者人はと尋ねればされば。今日は上町のお寺に法事ありとやら隣の迎の連れ立ちて。飯過ぎから参らんした何ぞ用かと問ひければイヤ餘の儀でも下らぬが京の暮も左前。何を賣りても思ひばかゆかぬは物がさすことよ。こなたが京に居た時は晝寝も戀の當の槌。外れて今は片思ひ。尤も世間は兄弟なれど。根は持ち寄りの子故の闇親父はそもじと娶合して。生先見んと言はるれど。母者人が呑込まず。其上そなたがいとしがる男が世話でよい身となり。京迄みつぎを上さるれば。云ふべき事はなけれども。そなたの事は束の間も忘るゝ隙もあらばこそ。何卒下り心底を語らんと思ふ頃。母者人から下る由これ幸いと晝舟に。乗りて下るも色の道折節も留守なれば。せめて情の

一言を。これ拜みます頼むぞと。ッし縫れ寄添ふたてやなかるは。興覺めア、うるさ何ちやいの近所の人も聞かざかし。何所の國にか兄弟同士さうした事をするならば。犬鶏と人云はん阿呆らしいと云ひければ。それはつれなし曲もなや眞實の同胞こそ。夫婦にこそはなるまじき元より他人の事なれば。此戀なんど差合ちや。イヤ兄弟とのたまふは。餘程素人な挨拶ちや。斯うしたとより差合を。さらば爰らで咄して聞かしよう。自然居士の淨瑠璃に。娘の方へ忍ぶとて。取違へつゝは。きぎに。縫れ縫るる鳥籠是を來て見よかしのと。ナホナホ子定規な口説言。シ可笑しくも亦いやらしう。心はむつとしけれども道を知らざる人でなし。荒立ては如何ぞと故意と言葉に艶を付け。尤もそれはさうなれど兄弟不義を取結べば。所をさらず神罰

にて鳩胸跛尪など。或は盲目の垣覗き。口鼻に鼻をげと。なるは見て來た如くなり其醜ひをば聞かす時は。身の毛よだちて恐し。さもなれば何のその。若い二度はあるまいし夫婦にならいで何とせう。先づ兄弟の縁を切り他人と成りて其上は。談合づくになりませう。此度は上らんせと。誠しやかに偽れど。ヤ。其手は喰ひませぬ。それは廓の焼言葉情だに預からば。只今死んでも本堂ちや。ア増明けてと抱き付くハテ離さしやれあれ。と逃げて廻れば追廻す。アうたてかりける次第なり。店先より物質はん。云ふ聲に。喜兵衛驚き狼狽て出でアレ物質が來たさうなおれは母に會ひがてら。迎に往て來う其内に。今のを頼むと言ひ捨て。ハヤオリ足早に。へこそは逃げて行く。是かるは嬉しく表に出で。見れば紙屋の喜右衛門

なり。ようござんした道入らんせと。煙草の火を入れお茶一つ。上げませんと云ふ手を取りて、コレ出羽殿。其後は會ひませぬ。先づは斯うして暮さるれば拙者も満足する。それにつけ此程銀子入用とて。兩度の文にあづかれど。手前の用事こと繁く昨日手代半六に銀子二貫目越したれば儘か返事に請取る様。何やら書いて來れども。某方より遣したる證文返らぬ不思議さに。わざ／＼取りに參つたぞ。元此金は廓にてそちを見捨てぬやうとの爲。書いて遣りたる金手形今は引かへ某と。挨拶よからぬ權兵衛の。手に渡りたる事なれば。あんまり可愛う思はねど男たる身が一言。金銀より猶堅く先づはお役に立ちまして。言交したる差引出入なしに済ましたが。悪人の心は定めなきものとは念を入れたがよし。斯うして居る内に權兵衛殿がわせたらば。痛

うもない腹探られん。早とく手形戻されと實なる中に當言を云ふも昔の所縁なり。かかるは墨の塵塗り。顔に焚く火の氣上し前垂の袂捻つたり。手そぼりの内尻目にて見るも馴染のしるしかや。暫くありて申す様。誠に好と云ふものはどう廻つても可愛なもの。今權兵衛様の世話となり斯うしては居りますれど。知らんす如く添ひ果つる身ではなけれど世の中の義理程せつなきものはなし。斯う申せば方様の恩を知らぬに似たれども。全くさうした事でなし。店の勤の初冠。權兵衛様の情にて。天神迄になりました。其折からの氣抜ひ。鳥の鳴かぬ日はあれど主のござらぬ夜半もなまし。わし故親御の勤當受け丹波の奥にまします内。こなさんに會ひまして廓の勤め逃れつゝ。さる方の仲人で揚屋の花車となりしかど。薄い縁やら口舌して

三行半を取りて退き。それから京へ上りつゝ親達に會ひまして。身の上の談合色色として見れど。とゞ様は後連。母様一人がほんの親何所やら油に水交る。其上兄と名を付けし。喜兵衛殿とめあはせんと聞くもうたてやアノ男。厭なり刃に兄弟と云ひ習した事なれば。根は他人にもせよ何にもせよ。悪名取らん悲しみに。右の様子を審に書き權兵衛様へ頼みしに。もと頼もししい人なれば何時でも下れとある返事。見るより取敢す母と連立ち參りつゝ。御厄介になりました扱此中の銀の事。さる方の挨拶で嫁入致す身拵へ。それ故申してやりましたこなさんも權様も。兩手とは云ひながら權兵衛様には義理多し。義理を立つるは傾城の譽と思ひ諸事のこと。許させ給へさりとては色にも香にも迷はぬを。竹ならばさて我胸を割つて見せ度や一人ある。

母さへ無くば世を逃れ姿を隠しと思へども。杖柱にもわし一人。頼む親をば捨て置かば不孝の罪も、怖しく。今は情と思し召し哀を問うて給はれと前後も、知らず歎きはしは、理。せめて哀なり。喜右衛門も共に涙を流しつゝ。あつばれそちは云ひ憎い。事を云うたり出来じたり。思ふ心を打開けて語るを聞けば何がさて。恨むは愚痴の至りなり。此頃迄立つた腹今さつぱりと埒明いた縦へ何處へ往かるゝとも心たよりになり申さんそれ先づ手形と責付かれて。さん候其手形も。備兵衛様の方に急に戻して給はれと。云ふ程陰事も有る様に。戻しては下んせぬもそつと待つて給はれと。云はせも果てず睨み付け。アアラ聞えぬ仕方なり。尤も少しのことなれどそちを目當に遣つた銀備兵衛にはやらぬぞえ。總じての取やり手形と銀を引替

に。するものなれど女の事。忘れたこともあるべしと何心なく銀ばかり渡したは。此方の過とは云ひながら。備兵衛ばかり義理立てゝ身は如何ならうと構はぬか。否でも應でも此手形取らぬ間は歸らぬぞ。さなくば銀子を戻すべし早やとくく」と詰掛くる。是かるは詮方涙にくく、れ皆私が過ぞ。許させ給へと手を合せ、暫し案じ居たりしが。稍ありて申す様手形を取つて戻す内。銀の請取扱は又手形の預り致しては。後日の出入あるまいこと。斯うして腹が癒るならば堪忍をして下んせと、涙を流し詫びければ。喜右衛門聞いて打領き。本紙の様にはなけれども重ねて出入なき様に。然らば書いてこされよと文を好めば書き付けぬ。女心にかるゝと筆喰ひ締めて假名交り。書いて仕舞うて印判を出して除す手のなやかさ。喜右衛門

一通懐中し。最早歸るぞまめで居や。此手形あるからは本紙は入らねど備兵衛が。手にある内は此鼻が一分立たず近い内。取りて戻されそれ迄はさらば」と云ふ所へ。何時の間にかは来りけん備兵衛表に立塞がり。なんと久しい喜右衛門殿。私に用あらば久寶寺町堀筋。所が違うた爰はこれ。木屋の出羽を拙者めが取つて置いた所ぢや。知つてのお出でふよりはや。かるを引寄せサア抜かせ。少しにても僞らば生けては置かじと打擲す。喜右衛門驚き中に入り是々聊願を召さるなよ。其女にも某にも若し誤のあるならば。御存分になり申さんそなたが聞いても某が仔細を聞かねば歸らぬと、氣色變つて罵れば。ハテ聞えぬば語るべし。最前見れば此女に何やら

書かせて取らるゝは。凡そ云はねど知れたもの。それを見て此男堪忍がなるべきか。知らるゝ如くきやつ故に。一家に疎まれ所帯すだて向右と變れば秋風の。吹くにつけては御自分に又乗りかへる分別を。残らず明せば了簡りょうかんする隠せば爲に悪からん。何とくゝと詰掛つりかくる喜右衛門今は堪られず。即コリヤ權兵衛。おぬしも人に知られた身又某も同じ事。様子も聞かず頭から不義の悪名附けられて。世間へ面が出されうかコリヤ今日是へ來りし通とほり云はんとするをかる抑へ涙を流し手を合せコレ申し喜右衛門様。お前の一分私しりが立つやうに致しませう。たとへ主はどまう云はれうと。此場に於て今の事。構へて云うて下んすな。お前に悪名附けたらば。一人の母を見ずみに果て此儘死する法もあれ。御難儀とては掛けませぬナウ權兵衛様。短氣たんきも悋氣りんきも時に依る言譯あ

れど後の事。云はで立たずば如何様とも心任せにしたがよい。女を捕へ見苦しいと。云へども放さずぬかし居れいやいや今は云はぬといふ。喜右衛門は存分ぞんぶんを。云はんくゝと駈出づる。かるは拜むと泣き叫ぶ。放せと云へば退けと云ひ。既に危く見えにける所を二人の下人ども己れ己れが主人を圍かこひ。させぬくゝと挑み合ふ。所へ母親喜兵衛を連れ。此體を見るよりもハツト驚き中に入り。様子は何か存せぬど只御堪忍遊ばせと。差別さべつ構はず引分くる兩人今は詮方なく。老母の挨拶あいさつ黙もくされず只今は歸るなり。後日の詮議しんぎ忘るなど互に言葉を残しつゝ。脇差の反直すれば腕捲うでまきをも下しつゝ。サア引けサアと聲をかけ。さらばくゝと立別れ。兩人尻目に血筋を張り睨め付けくゝ歸りける思あり仇あり情あり。人は迷の淵ぞかし。

下之巻 井傾城からくれなゐ

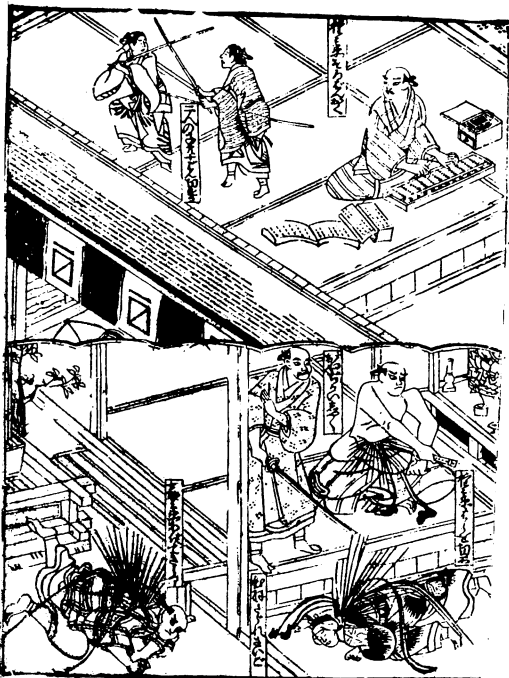
世や人の心なりけり誰が身にも。疑ひ探たづまりあり。過ぎし遺恨いこんをくひくゝと。思ひ升屋の權兵衛はかるが心を探り足。誰止めぬども通路かどみちに我と心はとめしかど。起き臥しの間も忘れ兼ね。不便と思ふ志今は引替えッ憎しみの。増まさりはすれど算盤そろばんの。桁けたはしらぬを觀みじつゝ明暮あけくれ家業油断なく。暫しばしも店を離れ得ず。水上帳みづの上を繰り廣げヤ、勅定ていじやうをする所へ。二人の子供こども驅來りあれくゝと。様兄上やまが。世機よき曾我そがの十番斬して遊ばんと言はしやる故。わしは愛甲あいがの三郎となり兄様が曾我兄弟。紫燕むらさきは柳樹りゅうじゆの枝に戯れ。白鷺しらさぎは菱花あやめの蔭かげに遊ぶと。笑ひながら打ち給ふ。其先肩さきかたへ當りつゝ殊の外痛む故最早はやくせまいと言ひますれば是非にせよとてあの如く。追かけてござんしたチ

ト叱つて下んせと。言へども兄は事と
もせず。あじやらにした事仰山な今度
はそなたに負けてやろ。サア今一度と
のゝれば権兵衛片頬に笑をなし。兄
が詫言する上は最早堪忍したがよい其代
りには吾殿又曾我兄弟と成り代り。と
が前でして見せよ悪い所を直さんと。
言はれてそんならいざござれと兄は聲か
け此次は。安西の彌七郎十郎目掛け渡し
合ふ。サア爰なりと聲合せ二打ち三打ち
打つ太刀の音も高紐のはづれより草摺三
間斬込まれ大居にどうど轉びしは。フシ不
便なりけり淺まし、淺間の嶽が信濃なる
下コレ白杵の八郎景信時致に打つてか
かる。得たりやかしこしまさしと。南
無阿彌陀佛の拜打。鬢先を打ちければ兄
は額を抱へつ。目に洩る涙押し隠し最早
せまいと奥座敷。逃げて退入れば弟は。
兄様堪忍々々と。跡より詫て入りけるは

へ。かるは只。一人来る身の逢はでのみ
焦るゝ身よりせつなきは。義理の手形ぞ
身を責むる主さへ見えなば取返し戻せば
胸も明け渡る。ハハハ夜明けの。鳥の。鳴
く音だにどうやら氣には懸れども餘所の
哀れを知らずかと。エエエ歩めど跡へ引戻す
身の上知らぬ哀れさよ。擧擧筋の門等に



て喜兵衛にはたと行逢うた。■シテマツ
 こなたは何所いと云ふ。喜兵衛聞いてさ
 れば母の言はるゝは。かる一人では此手
 形あたゝかに戻さうぞ。そち附いて行き
 取つて来い。早や往けと言はるゝなり。
 御身は是より歸られよ某参り。■埒明け
 ん。早とく〜と言ひければハテ譯もな
 い知りもせで。主は短氣な生れつき若し
 言分など召されては手形を。取らぬのみ
 ならず跡の首尾迄悪うなる。こなたは去
 んでよい様にかゝ様に云うてたも。今日
 は是非に埒明けて追付け歸らうも去なし
 やれ。然らば歸る有無の埒。明けてござ
 れと暇乞ひ。近所の店に立隠れ。■事の
 様子を窺ひける。■是かるは升屋に案内し
 奥に通れば内儀出で。■ようござんした
 其後は。何故に便宜も無かつたぞ。お袋
 様はまめなかと現在夫の妾をば。我妹よ
 り大切に云ふは貞女の養かや。■是かるは



袖より玩具お子達へお土産とて。兄弟へ
 進せて。■此程御目にかゝらぬ内ナウナ
 ウいかい御成人御隠居様にもお前にも御
 息災でお目出度やなせ兄様はとゞ様と小
 母が所へござんせぬコレとゞ様はと云ふ
 所へ。■權兵衛裏より歸りつゝ物をも言
 はす中の間にどうど居坐り髭抜いてフシ
 素知らぬ顔して居たりける。■是女房子供

の手を引いて。皆おちや隠居へ往て遊ば。

かる女郎そこで遊ばんせ後程ゆるりと話しましょと、フシ氣を通しつゝ入りければ。善きかるはつく／＼打守り扱耻しのお心や。如何なる賢女なればとてあの如くにはならぬもの。云うても我は忍妻猪む氣色は露なくて。便なれば折に觸れお見舞などに預りし。フシ冥加の程も怖し。善き何卒御恩を報ぜんと思ふに甲斐もなき縁に引かれて廻るわしが身でわしが儘にはならぬども。アノ奥様の御仕方見て離れぬは未練なり。爰にも大事の義理一つ。せつなき事を重ねしは此身一つで止めたり。それはさうぢやが此程は、鼠の道を切つた様なぞ訪れもない事ぞ。餘り不思議に思ひましょ頼見にやら内方へ御禮がたらに來ましたが何を見付けて其様に。滅多に腹を立てさんす。こなさんの御腹立合點しては居ますれ

ど。先度の場では言はれぬ事根を聞かん

したら腹の立つ事は扱て置き拜まんしよ。附付いては何時ぞや預けたる紙屋の手形を戻さねば。方様の疑も又私が志。彼れ此れ心の隙あかず。何を云ふものこなさんの爲悪しかれと思はねば。一人烟を燃すだけほんの損氣と思はんせさうぢやないかと寄り添へば。權兵衛突退け。あた見苦しい置いてくれ。最前からぬかず事解で云うた臺詞にて。一つも誠を聞き取らず。扱て又紙屋の銀手形宛名はおのれにしてあれど。まさかの時は喜右衛門に異議云はせまい其爲に、某方に預つた欲しくば取つて去にくされと。手形をかるに打付け。奥に入らんとする所を後より抱き止め。コレ男如何に女なればとて悪口は云はぬもの。成程手形は取りました言ひ度いことは多けれど。重ねて言譯する迄よ。ほんに醜の片思ひ

ッ寤ましやんせと云ふ所へ。喜兵衛店

より案内す。權兵衛立出で御用如何にと尋ねれば、ヤアコレハ權兵衛様か。先日一寸御意得たるかるが兄弟喜兵衛とは私こと。京都に住宅仕る只今御目にかゝること。近頃不調法の至り。併し貧乏障なし其段は御了簡にあづかります。殊にかるが身の上迄だん／＼御世話になさるゝ事。親父も満足致さるゝ就いては去年十月より。今月迄の養料かるが方よりくれませぬ。それ故下り聞きますれば御自分も御身代今はすつきり祐成にて宛行は扱て置きかるが世話になり給ふと。聞いては曰から杵ぢや迄。それに就き姉ぢや人顔に艶ある其内に。何方へも縁につけ親どもが入前。楽しみ度いと申すにつけ嫁入の口きけば。幸ひの所あり是に極め談合すれば。若替が一つもないと云ふ。あんまり興がる事故に様子を問へば曲げた

とやら流しとやら申します。拙者今日参る事かると挨拶切つて貰ひ。又内證の遺緒をすめて貰はん其爲に。●わざ／＼推参仕るサア埒明けて下されと仔細らしく伸し上げるかるは驚き走り出で●コレ喜兵衛殿何し爰へござつたぞ。其上入らざる差配立て殊には表人も聞く。早う去なしやれ早去にやと手を取りて引立つる●ハテ異なる事を云ふ人ぢや。そなたばかりが呑込んで此鼻が呑込まず其上なくとくおふといふ。年寄つた親がある。盗人の黨寢さへ當がなければしませぬぞ。●否でも應でも隙状と紙屋の手形貸した物。今日迄の扶持方と束ねて埒を明け給へ。さうした人にうか／＼と鼻毛讀まれ行末は。如何なる果ての思案なく一つ云うては義理々々とひだるい義理が立つものか。餘程白痴をつくされよ歸つてよくばこなた去にや。此埒明けねばにじら

ぬと猶いかつげに云ひければ。かるは取付き手を合せ拜みます云はしやるなと止めんとなれば權兵衛突き退け。喜兵衛。成る程埒を明けてやる。先づ／＼道入りやと内へ呼び。●ヤイ女思へば／＼憎い奴。尤も兄弟有りと云ふ咄は豫ねて聞いたれど。何のこいつが弟であらう言はねど知れた作物。此度の仕掛はな。今某は左前其折節に喜右衛門が。かつて取持つ嬉しさに又乗替へる下精ひ。●ぬかさねど知れた事。おのれが様な不所存者憾を云うて入らぬもの。●望みに任せ取を遣る。此隙状を額に當て大坂中へ嫁入せよ。老老傾城畜生めと。言へどもかるは答なく差俯向いてしやくり泣き。ほんに取を下んすかさすればわしが爲なれど。何處やら根葉も有る様に誠を明して下んせと。云ふに權兵衛怒り望みの如く金手形隙状迄をくる／＼上。おのれが言分あるべきか其

上喜兵衛が望みには。飽迄金の催促し、白晝にちめんを隠し人に知られた權兵衛が一分を捨てた上。成程銀子も渡すべしサア請取れと言ひ様。刀掛なる脇差を取ると見えしが抜打ちに右の頬先を斬付けられ。はかなやかるは縁先の、いぬゐに斃れ伏しにける喜兵衛驚き狼狽つゝ裏の干場へ逃げ廻り。あなたこなたと隠れる權兵衛續いて。追掛け。おのれ生けては返さじと。追廻しては追戻す三危かりけるへ次第なり。喜兵衛詮方泣く泣くも井筒の陰に身を縮め。皆私が過りなり命を助け給はれと。言はせも果てず後より大袈裟に斬付けられ。よろ／＼よろとする所を飛び掛り取つて抑へ。尤もおのれが心底に一物ありと云ふ事は。先立つて見て置いた最前よりぬかした事思へば憎し腹立ちと拳を握り齒嚙をなし打ちたる所を幸ひよ束も通れと滅多突き

あつとばかりを最期にて、フシ遂に空しく成りにける。ヒ此壁に親女房あわてふためき走り出で、ココリヤ権兵衛は氣が違ふたか。何故人をあやめたぞ様子はともあれ町人の。一人ならず二人迄殺して遁れはあるまいに。人知らぬ内、オホキ速に何故自害をば致さぬぞ。時移りなば、ヒ纏目の恥縛首を打たるゝぞ。ヤイウろたへたる権兵衛と、ヒ親の身として子に死ねと。勤めながらも死してはと思ふ色目の内よりも、スエナ涙を流し居たりけり。ヒハツト権兵衛差俯向き。ヒ全く所存は變らねど。一つはお前にお暇乞只今迄の不孝の段。御赦免をも蒙り又は悴が行末も。何卒頼み上げん爲め暫く時を移したり。先づ以つて今迄は心に叶はぬ私故。ヒ様々の御苦勞せめて一日御心を。休め申せし事もなく斯様の死を遂げ申すこと。死しての冥加先ミヤコの世の暗き闇路も尚暗く、フシ迷はん

事も親の罰。ヒ願はくは只御一言許すとあるを承り。死出の土産と存するなり。彼オホキ奴等を手かけ申す事斯様々々の仔細故。差詰め男の意地なれば。即座ソウザに存分ソウブンに遂げ候、ココリヤ女ども子供を是へ連れ來れと。二人の左右に置きながらヤレ兄弟。と、は只今死するぞえ吾殿ウゴが最前の十番斬は我身の上。是目前の辻占よ。今よりして祖父様。我と思ひよく仕へ。某不孝にありし程成り代りつゝ孝行を偏ヒに頼む何事も、スエナ仰せを背く事勿れ。ヒ成人の後家を立て母にもよく、ヒかしづかへ言ふ事聞けよわやくすな。ヒ取分けて女どもお事が手前の恥かしさ男ながらも如何ばかり。ヒかるめが事は此前に思ひ切るべき所をば。そちが賢女を立つる程猶々不便に思ひしこと。よつく前マ世の業人ども。寄り集りし事なりと身ミは了簡シヤウケンをしながらも。御兩親の御手前殊

には御身今迄は。内外ナトウガイともに首尾つくり萬端心を付けられし。スエナ嬉しさ死しても。忘れまじ。ヒ子供が行末オホキに草葉の蔭より護るべし名残は何時も同じ事時刻移らば惡からん。それ佛前へ火をあけと押肌オシヒ脱げば人々はナウ悲しやと取付くを父親手代を密ヒに呼び。婆嫁子供を連れ退けと。色々諫め給へども現在我子や妻メや子の。親の最期を見逃しに如何ヒでか難れ行くべきぞ。せめて御最期見届け度し。是非々々此處にとのたまひて緋り付きて歎ヒきしは理せめて哀れなり。ヒ親爺眼に角を立て故意と言葉を荒らかに未だ死にもせぬ先からしてめろ、ヒほえるは何事ぞ心付き。無體に伴ひ入りけるにぞナウ今暫し云ふことあり。先づ、ヒ待つてと云ふ聲は、ヒ是ぞ此世の別れかや。ヒ又兵衛うろく、ヒ涙含み裏の戸ひしと差寄せ。

立歸つて見てあれば權兵衛腹を半切り。

れ惜しき人かなと今に譽を残しける。

うんとばかりの肩息に父親はつと氣を上げしが。我と心を取直しヤイ狼狽者、手手が廻らぬ。ま一つ引けと勇むるは世に譽ある武夫も、是には如何で増さるべし。權兵衛も權兵衛、つとも騒がぬ體。未練は候はねど脇差に血傳ひ手の内心の儘ならず。とても慈悲に差換を給はれかしといふを聞き。心得たりと取出だしサア潔よく死を遂げと。口には勇め心には扱も是非なき事かなと。忍びに涙を流さるゝ權兵衛差換押戴き最早此世の御名殘随分御無事に候へと。南無阿彌陀佛を暇乞ひ腹一文字に掻き切り。返す刀を喉笛にぐつと通せば親心。死骸にひしと抱き付きわつと叫びて泣き給へば一家一門近所より駈付けく様子聞き。前代未聞の男かな又例なき親心と。各々涙を流しける。父父たれば子も子たり。喃

